厚生労働科学研究費補助金　(難治性疾患等政策研究事業)
難治性の肝・胆道疾患に関する調査研究
分担研究報告書

劇症肝炎患者の脳死肝移植待機登録状況と移植実施率、待機死亡に関する調査

研究協力者　玄田　拓哉　順天堂大学医学部附属静岡病院消化器内科　先任准教授

研究要旨：2007 年 3 月から 2016 年 3 月までの期間に、脳死肝移植待機ﾘｽﾄに登録された成人（≧18 歳）劇症肝炎患者は 264 例で、成人登録患者の 11%を占め、2 番目に頻度の高い原疾患であった。2010年以降の劇症肝炎患者に対する脳死肝移植は一定の率で施行され、安定した実行性が示された。一方、待機死亡率（非移植生存率）は過去10年間での登録時期による差は認められず、劇症肝炎に対する内科的治療による予後改善が困難な現状が示された。

共同研究者
市田隆文　湘南東部総合病院　病院長

A. 研究目的

脳死肝移植待機登録された劇症肝炎患者の現状を調査した。

B. 研究方法

2007年3月から2017年3月までの期間に、脳死肝移植レシピエント候補として登録された成人（≧18 歳）劇症肝炎患者を対象とした。患者背景、脳死肝移植施行率、待機生存率について解析した。

C. 研究結果

当該期間に登録された成人レシピエント候補患者 2431 例のうち、劇症肝炎患者は 264 例で登録患者の 11%を占め、C 型肝硬変に次いで 2 番目に頻度の高い原疾患であった。2011 年度以降は年間 30 例から 40 例程度の劇症肝炎患者が待機登録されていた（図１）。患者年齢は 50 歳代が最多で、男女比はおおむね 1:1、病型は LOHF を含む亜急性型が 67%を占めていた。病因は、原因不明例が全体の 40%を占め最多であった。待機中の内科的治療として血液浄化療法が 70%に、血漿交換が 80%に、ステロイド投与が 40%の症例に行われていた。年度別に内科的治療選択を比較すると、血漿交換施行率が減少し、血液浄化施行率が増加する傾向が認められた（図２）。対象患者を 2007 年-2009 年、2010 年-2013 年、2014 年-2016 年登録の３群に分けて累積脳死肝移植施行率を検討したところ、2010 年の臓器移植法改正以降脳死肝移植率は上昇したが、2010 年-2013 年、2014 年-2016 年登録の２群間に統計学的な差は認めなかった（図３）。一方、待機生存率（非移植生存率）は３群間で差が認められなかった（図４）。

図１

図２

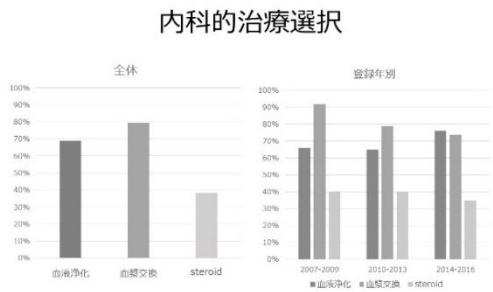
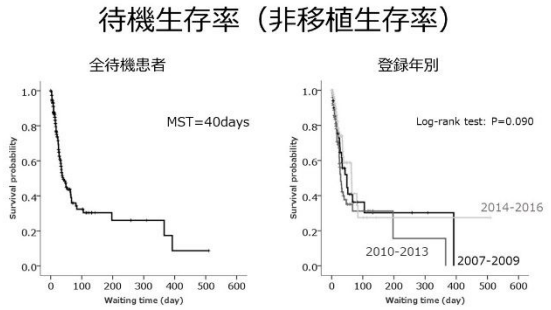


図３

図４



D. 考　　察

2010 年の法改正施行後の脳死ドナー数増加により劇症肝炎患者に対する脳死肝移植施行は増加し、一定数の脳死移植は期待しうる状況となった。法改正直後と最近の移植施行率を比較しても差は認められず、法改正後の脳死肝移植は一定の施行率で安定している状況であり、劇症肝炎に対する脳死移植は現実的な治療選択肢の一つとなったと考えられた。一方、待機生存率は過去 10 年間で変化はなく、内科的治療による予後改善が困難な現状が示された。

E. 結　　論

劇症肝炎患者に対する脳死肝移植は一定数の実施が期待しうる状況である。

F. 健康危険情報

なし

G. 研究発表

1. 論文発表

なし

2. 学会発表

なし.

H. 知的財産権の出願・登録状況

1. 特許取得　なし
2. 実用新案登録なし
3. その他　なし